

柳 東弦 (リュウ ドンヒョン)

韓国出身

筑波大学 人間総合科学研究科体育学専攻 博士課程

日本語を通じて得られたこと

高校生の時の私は、日韓剣道交流戦を行い、その後、交流戦を通して知り合った日本人の剣道選手が私の家でホームステイをするようになった。しかし、その時は日本語が全然できない状態であったため、身振り手振りをしながら会話をした。そして、高校3年生の時は日本に行って2週間大阪大学の剣道部と一緒に稽古を実施した。しかし、その時ある先生が私に剣道を教えてくださったが、日本語ができなかった私はその指導を理解することができなかった。このように、日本語で会話ができなかったことで残念な事が生じている私の様子を見た結果、いつかは日本語を勉強しなければならないと考えた。

日本の留学を決心した時期である大学3年生から日本語を学び始めた。最初の頃にはYouTubeを通してひらがなやカタカナを分かりやすく覚える方法を教えてくれる動画を見ながら日本語勉強をやり始めた。後に、単語や漢字などを勉強している中、私が覚えた日本語の単語を口から出さないと忘れてしまう、すなわち誰かと日本語で会話しないと日本語能力が早く伸びないということを気づいた。しかし、私の周りには日本語ができる人や日本人の友達はいない状況であった。そのため、日本語塾を登録して日本語を学びたいと考えていた。ところが、大学生の時は剣道選手として活躍して

いたため、大学授業を受けながら午前・午後には稽古を行い、その後は個人的に残りの運動を実施していたので、時間的に不足していた。さらに、その時期は大学の寮で生活していたため、夜9時以降からは個人運動以外の件で外に出ることは不可能であった。しかし、日本語を勉強したいという強い気持ちがあったため、指導教員と寮の係員、先輩に相談を行い、日本語の塾を登録することができるようになった。その結果、私の元スケジュール(午前稽古→大学授業→睡眠→午後稽古→睡眠→個人運動→図書館→睡眠)から新たなスケジュール(午前稽古→大学授業→睡眠→午後稽古→日本語の塾→個人運動→図書館→睡眠)に変更されるようになった。スケジュールの中に睡眠が多いのは次の運動に尽力するため、いわゆる体力を回復するために目が冴えている時もわざわざ寝ようとした。

日本語の塾を通いつつ図書館で勉強をした結果、大学4年生の時日本の仙台大学で半年間交換留学生として生活することができた。日本に留学したことを契機に、日本人の友達ができ、日本の文化も学べるようになった。さらに、仙台大学の剣道部と一緒に稽古を行いつつ日本の剣道を学ぶことができた。そして、初めて日本語で授業を受け、日本語で課題を提出し、日本人の前で、日本語でプレゼンテーションなどを行なった。また、日本語で海外の人々とコミュニケーションをすることで母国の人々の考

え方のみならず海外の人々の考え方も知るようになった。それらの貴重な経験が可能となったのは日本語を学んだためであった。

そして、現在は、筑波大学院生として指導教員から研究指導を受けながら研究活動をしており、筑波大学の剣道部の先生に教えを貰って剣道部と稽古をしている。

このように、日本語を通じて海外の人々との繋がりが形成され、日本人の先生の方々から貴重な指導を受けることができるようになった。さらに、自分の研究を母国のみならず海外にも紹介することもできるようになるなど、日本語を学んだことにより、貴重な経験を積むことがなった。それらの経験は私の人生の中で非常に重要な財産ではないかと考えられる。

以上